

江戸時代、現在の信濃川河口の東側に、新発田藩領の湊町である沼垂町がありました。沼垂町には藩の年貢米をおさめる「御蔵」が置かれ、重要な拠点のひとつとして位置づけられていました。

は王瀬の北部へ、その後、大島というかつて信濃川河口にあった島へ、さらに蒲原へ、そして現在の長嶺あたりへと移転を繰り返しました。本展ではこうした町の移転(背景)や町域拡大に関わる絵図を紹介いたします。

当館では、この沼垂町に関わる「沼垂町役所文書」を所蔵しています。「沼垂町役所文書」は沼垂町と新潟町とのあいだで起こった争論関係の史料の他、町に関わる諸々の史料、さらに沼垂小学校の校長で郷土史家でもあった大橋順二氏が作図した絵図写等からなる史料群です。本史料群は総点数もそれほど多くはなく、また残存のしかたも偏りがあるため、ここから近世沼垂町の全容を知ることが難しいと言わざるを得ませんが、近世史料があまり残っていない沼垂町にあって、これまで基礎史料として活用されてきました。

また、沼垂町は対岸の新潟町と河口における湊の権利や島々の帰属をめぐって度々争いました。延宝九(一六八一)年の王瀬の堀割普請をめぐる訴訟以降、敗訴を重ねました。特に享保十二(一七二七)年の敗訴によって廻米船・領主用船以外の廻船の入津が禁じられ、沼垂町は商業港としての機能を大きく失いました。これによって、たとえば沼垂町商人が所有した、渡海する商業船は係留や船囲も新潟町側で行わなければなりません。さらに文政十一(一八二八)年、藩財政の悪化等の理由により大坂廻米が中止され、文政十三(一八三〇)年には浜での交易も否定されました。本展ではこうした沼垂町の湊の権利に関わる史料も紹介いたします。

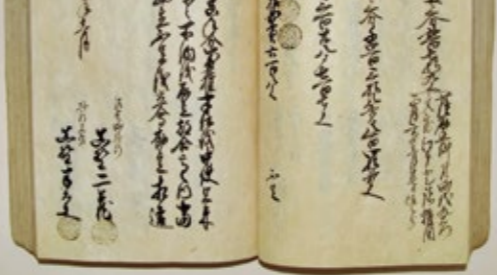
はじめ、町における暮らしに関わる史料を展示します。たとえば「写真」の「年々万雑内済払帳」という史料は、安永七(一七七八)年から文化十一(一八一四)年までの三十七年間にわたる沼垂町の町人用「万雑」の記録です。「万雑」は町の諸費を町人から徴収した金銭によってまかなった、町内会費のようなものであり、限られた期間・内容ではありますが、ここから町の財政状況(グラフ)をはじめ人口の変化などもうかがえます。

関わる史料を展示する予定です。本展が、河口にあったもう一つの湊町「沼垂町」の姿を、あらためて知る機会となれば幸いです。(あたか しゅんすけ 学芸員)

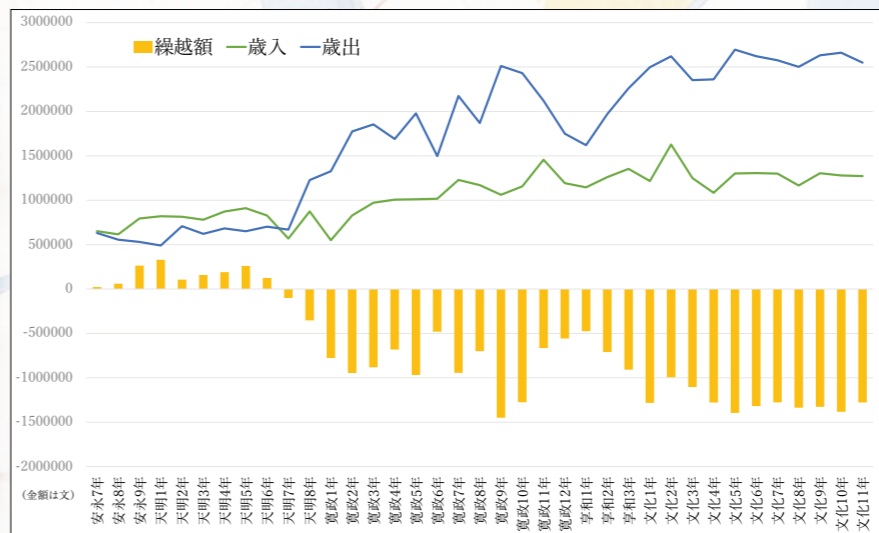
本展ではこの「沼垂町役所文書」を見直し、平成二十七年(二〇一五年)に開催した「沼垂」展から、さらに掘り下げた近世期の沼垂町の姿を紹介します。

沼垂町は江戸時代のはじめ頃は王瀬のあたりにあったといわれています。その後、河口の地形の変化に伴い、ます

命で御用を勤める御庭番ではなく、老中水野忠邦の命によって調査した者の報告であろうと述べています。私も水野が勘定奉行の命による探索、執筆と考えます。少し大沼氏に補足します。「廉書」には天保二年に修就が遠国御用を勤めたこととあります。その時の「日記書抜」には、「五月二日より十九日頃迄遠国御用二面引」と記載されています。ほかの御庭番が遠国御用を命じられたという記事もありです。自分が遠国御用を勤めたのなら、「廉書」や「日記書抜」に記載したはずで



【写真】年々万雑内済払帳(当館蔵)



【グラフ】沼垂町の財政状況

【背景】四度目沼垂町割王瀬山崩西川会河新濁川端堀口両湊絵図(当館蔵)

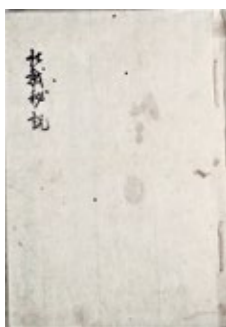
「北越秘説」の報告者

『帆橋成林』四十八号で天保六(一八三五)年の唐物抜荷事件の発覚は竹島事件の余波と書きました。天保十一年の二回目の唐物抜荷事件は、初代新潟奉行川村修就の所蔵文書にあった天保十一年九月上申の「北越秘説」が原因だと考えています。これは別に述べましょう。

昭和九年刊行の『新潟市史』は、「北越秘説」を修就自身が探索した報告書としました。「北越秘説」が修就の筆跡で川村家の文書の中にあり、修就が御庭番として船売りに扮装して新潟を探索したという話があったからでしょう。以後、『新潟市史読本』や中野三義氏の著作など、これを継承している記述が多いようです。また、小松重雄氏は「幕末遠国奉行の日記」で、大沼淳氏から修就の「日記書抜」に天保十年の六月四日から八月九日の記事がないことを聞き、この時期に「北越秘説」を執筆していたと推測しています。

一方、大沼氏が書いたと思われる新潟市郷土資料館調査年報第六集の解説はこれを否定します。「御庭番内々遠国御用被仰付候廉書」(以下「廉書」)では、遠国御用はすべて現役の御庭番が勤めるが、修就はすでに賄頭。この文書に「北越秘説」に相当する御用の記載がない。したがって、將軍の

命で御用を勤める御庭番ではなく、老中水野忠邦の命によって調査した者の報告であろうと述べています。私も水野が勘定奉行の命による探索、執筆と考えます。少し大沼氏に補足します。「廉書」には天保二年に修就が遠国御用を勤めたこととあります。その時の「日記書抜」には、「五月二日より十九日頃迄遠国御用二面引」と記載されています。ほかの御庭番が遠国御用を命じられたという記事もありです。自分が遠国御用を勤めたのなら、「廉書」や「日記書抜」に記載したはずで



「北越秘説」(当館蔵)

収蔵資料紹介

豆挿し具

大豆は各種の料理やきな粉・うちは豆・納豆・味噌など様々な加工品に使われる食材です。農家では、様々な品種の豆を自家用に植えました。現在、当市は大豆、特に枝豆の産地として知られています。郊外に出ると豆木の並ぶ枝豆畑を見ることができ、かつては田の畦にも豆を植えました。

豆挿し具は、畦や畑の豆植えに使う道具です。本県の豆挿し具研究の先駆者上原甲子郎は、地域ごとに多様な形や呼び名があることを指摘し、豆挿し具を大別して六つの型式(細別九形式)に分類しています(上原一九六九「豆挿し具」『民具マンズリー』二巻五号)。写真上の資料は上原が杵型式と分類するもので、当館所蔵豆挿し具のほとんどがこのタイプです。上原によれば広く分布する型式で、豆さし杵や豆突き杵などと呼ばれました。

豆さし杵の使用法は、一人が杵で畦の土をたたいて穴をあけ、もう一人が二〜三粒の豆を穴に入れ、その上に藁灰か粉殻の燻炭を入れて穴をふさぎます(『黒埼町史』)。杵型式の豆挿し具を用いた作業は二人がかりで行い、植える量が少なくと小鎌を用いて一人で行う場合もあります。作業量に応じた豆挿し具の使い分けがあったようです。写真下の資料は上原分類の棒型式Bの形状に近

いもので、スコップの柄を利用・加工したと思われる。民具の再利用例として興味深い資料です。

畦の豆植えは五月の田植え前後に行われ、十月に入ると豆木ごと引き抜き、円形に積み重ねて「ニオ」にして乾燥させました。稲の収穫作業を終えると、干した豆を落とす作業をしました。畦で育てた豆は、味噌用であることが多かったようです。畦豆は水田の土地を利用し、毎年新しく築く土の畦を豆の連作に活かした技術です。豆挿し具は、水田耕作とその環境を活かした人々の生活の技術を現代に伝えてくれます。(森 行人 学芸員)



豆杵と豆挿し